

# 芦屋道満大内鑑

## 大序 大内の段

風に嗚ぶ青嶂の外、雨に嘯く古林の内、尖れる  
鼻先蔓延る尾、小前大後色中和を兼ね、死すれば丘を  
首にす、これこの妙獣、百歳誰れか知らん、女と化  
し、苔の褥に草枕、契りを人に同じうす、葉末の露や  
末の世に、日月星度の光を掲ぐ、昔を問へば天地の、恵  
みに育つ蘭菊や、花ぞ都の香に匂ふ。  
されば朱雀帝、賢王と申せども、天地の氣候陰陽の狂  
ひにや、この頃出づる月影の、白虹に貫かれ甚だ光を  
失へば、東宮桜木の親王の御方に於て、この事評議ある  
べしと勅を請け、

で見えぬ時もあり、西国で見えぬ折もあり。況や境  
を隔てたる唐天竺、日蝕とも月蝕とも知らずに済ます  
こともあるべし。この度の天変もその通り。唐天竺は  
いさ知らず、目のあたり明らかに見付けたる日本の  
禍ならずとは言ひ難し。かく言へばとてその家にあ  
らざるこの好古、是非を申すも恐れ多く、過ぎし頃身  
罷りつる天文の博士、加茂の保憲が娘、神の前と申す  
者、女なれどもその家に育ち父が伝への片端を、存せ  
ぬことはあるまじと召し連れたり。女なれば恐れもあ  
るまじ。召されて子細を御尋ねあるべうもや」  
と御免を受けて呼び伝ふ。

声をするべに立ち出づる、初めて上る雲の上、さすが女  
の気も弱く、薄氷を踏む如くにて、胸は虚の打掛姿、  
おめざ場うてぬ顔しても、そぞろ顫うて畏まる。

左大将きつと見、

「加茂の保憲が娘、神とは汝よな。男子なれば親が遺  
跡勤むる年輩。伝へ知つたることあらば、この度の天  
変きつと考へ、善悪を包まず真直ぐに申し上げよ」

左大将元方、  
小野の好古、

諸寮の司、末々の官掌まで次第を乱さず参列し、昼ま  
で残る月影の、空を眺めて取り取りに、愚意を述ぶるも  
及びなき、雲を掴むが如くなり。

左大将笏取り直し、

「つらく思ふに三千世界月一つ日一つ、天竺で見  
るも唐で見ても月日の光に二つはなし。しかれば白虹月  
を貫くこの天災、あながち日本の祟りとも一途には定  
めがたし。万一、唐天竺の禍なれば心を悩ます程が  
失墜。なんぞこれといふ形の見ゆる時、評議なま  
るゝとも遅かるまじ。この儀はこの儘捨て置かれ然る  
べし」

と相述べらる。

小野の好古正笏し、

「イヤくそれは理屈一遍。聖主天下を知ろし召す民  
を恵みの御心には外れたり。間近くたとへを取つて言  
はゞ、日月の蝕の如く、この日本の内でさへ、東国

と仰せける。

「これは恐れあるお詞。女のことなれば伝へしことは  
なけれども、兼々父上の門弟衆に教へ給ひしを余所な  
がら承り置きしが、一つの真ん丸なものを宙に吊つ  
て置けば、その丸い物に自然と東西南北上下も定ま  
る。これを月日にたとへて、西は天竺、東は唐、南は  
日本、北はどこと、分野といふ物を分かつて、諸事考  
ゆるがまつ天文の手習ひ。この度の天災、白虹日を貫  
けば天子の御身の崇りなれども、月の体を貫きしは東  
宮様の御憤み。下として上を冒すといふ天道のお知  
らせなれども、国を乱し民を損ふまではなし。科戸の  
風の天の八重雲を吹き払ふ様に、ささりくと消えて  
行くと、知つたがましよう申し上ぐるも聞き伝法。易は  
変易なりとやらん申せば、女の及ぶことでなし。私の  
父、天文の名を揚げしも、唐土の伯道仙人より、金鳥  
玉兔集といふ書を伝へ、近き君の守護となり、悪事  
を善事に転じ返し、兼々その書を保名殿に譲らんとは  
申されしが、急病故になんの遺言もなく、館の内に勸

請せし大元尊神の社にその書を納め、箱の鍵は自ら扉の鍵は母に預け果てられし。哀れ道満保名両弟子の内、いづれになりとも書を譲らば、かゝる大事の御時の御用は欠かじ」

と憚りなく言ふ事言ふて仕舞ひしは、さすがに親の娘なり。

東宮御声さはやかに、

「女ながら榊が訴へ謂れあり。その道満保名とは誰れやらん」

と問はせ給へば、

左大将

「さん候、道満と申すは芦屋の兵衛と申す某が召使ひ、保憲が門弟の第一番。保名と申すは好古の家来、天文の稽古ついに聞かず。委細好古に御尋ね」

と、申し上ぐれば

取り敢へず、

「安倍の保名と申すは某が家来、希名と名乗りし者。年来天文に心を委ね、保憲が門人となり、師匠の保の

一字を許され、保名と改め候」

と、二人の訴へ

詳らかに聞こし召し、

「保名、道満、その業に甲乙なければこそ、保憲が存生にいづれへも書を譲らず身罷りけん。この上は左大将の執権岩倉治部、好古の執権左近太郎二人立ち合ひ、大元尊神の神慮に任せ、いづれなりとも神の心に叶はん方へ、金鳥玉兔の書を与へよ」

と宣へば、

お供に候せし岩倉治部

左近太郎、階下にひれ伏し畏る。

「治部の大輔左近太郎とは汝よな。四海の悦びは磨が悦び、磨が嘆きは四海の嘆き。これ、おぼるげの業ならず。必ず互ひの鬘鬘を拒み、神慮に違ふことなか

れ」

と、入御ならせ給ひける。

仰げば高き久方の、空に限りはなけれども、それさへこゝに計り知る君が御代こそ

## 加茂館の段

打ち栄えて。

水上清き片瀝や、加茂の氏人保憲の館、保憲死去のその後、姫の養育髪切りて、後室殿と内外の人の敬ひ持てはやしに、誇る悪事ぞうたてけれ。

中の間に立ち出で、

「腰元共、腰元共」

と呼び喚き、

「エ、どいつを見ても居眠りたそうな顔付き。榊は部屋にか。上様へ上がったを、大きな顔で昼寝して居ぬか。皆手ん手に棒でも持つて擦り起こせ、撫で起こせ」

と、真綿に針を包む折から。

「御舎兄治部の大輔様、密々の御用とて御出でなされ候」

けれども、廻らうよりは近道と平馬と内証示し合はせ、明けにくい宝殿の扉や箱、開けたが思案落ち着いて下され」

と、簞篋内伝の玉兔集、治部に渡せば

びつくりし、

「これはどうして取り出した。尤も扉の鍵はその方が預かりなれども、箱の鍵は娘が預かり兼ねて聞く。大事に掛け肌身を離さぬ」

「サアその離さぬを智略にて、盗人の隙はあれど守袋も寝る内は枕元へ忍び、鍵の寸法写し取り拵えしこの合鍵」

「ハ、アしたりく、さすが治部が妹程ある、出来た出来た、有難し忝し」

と押し戴き、

「この書を道満にやれば、あれも出世、こちも出世。出世だらけよいことだらけ。この状こそ幸ひ、保名めを盗人にする仕様もあらう。うまいく」

と悦べば、

「そのうまいを着に、御酒一つ参らぬか」

「それは耳寄り、兎も角も」

と、馬の合ふたる平馬が案内、

人喰ひ馬に間の戸を、引き立てゝこそ入りにけれ。

榊は我が使ふ腰元を誘ひ、

「サアよい隙」

と部屋を出で、

「もう刻限は何時ぞ。言はずとも気を付けて、小鳥共こゝへなぜ出さぬ」

「イヤ申しお姫様、今日はお前のお心は小鳥どころぢやござんすまいがな。今朝の御所様のお詞。千に一つ御鬮が道満殿へ上がったら、どうせうと思し召しませす」

「サア、それ故早うお出でなされと文を遣つたれば、もう見えるに間はあるまい。お出でを知らせのお鷹のため、直せと言ふ小鳥籠、小言言はずと早う並べいと手ん手に持ち運ぶ

飼ふて心の慰みと、人に見するは驚よ

二人が中の語らひは、末長かれと尾長鳥

朝夕こゝに置きまして、見つ見せたさの顔佳鳥

笑ふ口々囀る鳥

声高扉の外面には、忍び来る安倍の保名、編笠深く顔隠し、忍びてこゝに立ち寄れば。

お供の与勘平、鈴付けし小鷹を手に据え走り着き、

「お旦那、あれく小鳥共が囀る。榊様お出でをお待ち兼ねと聞こえた。こつちもお鷹を使ひに知らせん」

と拳を放せば

飛び上がり、戻り羽振り羽毛を振り、鳥の音に眼を付け籠をむんずと掴んだり、

「ヤレお出でなされた知らせの鳥。嬉しや嬉しや腰元共、鷹を与勘平に渡し、小鳥共片付きや」

と、庭に駆け降り裏門口、開けて招けば

顔いて、入ると締め合ふ手の内に、色と思ひを含ませり。

与勘平鷹を据え、

「コレ腰元中、拙者は人目あり、帰れと旦那の仰せ罷り帰る。コリヤ鷹よ、いつ来てもいつ来ても、鷹骨折つて旦那の餌食、堪へ性のよい鷹めではあるはこ」

と、小踊りしてぞ帰りける。

榊囁き、

「御所の首尾は最前文で申す通り。御鬮といふものは、天道次第運次第。心に任せぬ神の掟。運の弱いお前なれば、今日の御鬮も私には上がるまでも氣遣ひで、胸の踊りをコレ見さしやんせ。頼むは大元尊神茶枳尼天。サア一心に祈誓をかけ、お前に御鬮の上がる様に、共に祈念は怠らぬ」

と力を付くるぞ、わりなけれ。

「オ、馴染なればこそ忝い。我れも文を見るより御鬮の善悪。直ぐに生死と定めしが、言やるを聞けばそうでもない。信あれば徳あり。神は正直の頭に宿る、力を添へたべ、随分神慮を仰ぐべし。とは言ふものゝ、烏帽子千早も掛けずして、この平服恐れあり。なんとせう」

「幸ひ幸ひ、父上の素襖烏帽子、わしが部屋にある、取つて来い」

「アイ」

と急げば急ぐだけ、行くより早く持つて来る、

「才、真に真に、目馴れし師匠の素襖烏帽子。今日着するといふは吉左右々々々。冥加あれ保憲公」

と押し戴き押し戴き、着せんとする所へ、  
あたふた奥へ行く女

「なんぞ」

と問へば

「左近太郎のお出で故、知らせましに」

と走り行く。

「御傍輩の中ながら、見付けられては事喧し。小枝が部屋がよい所、いざこなたへ」

と打ち連れて、装束

取り持ち、入りにける。

好古の執権左近太郎照綱、案内させて座敷に通れば、

御鬮を取らば、保憲直に譲る心。まつ書を先へ取り出だしては如何ござらう」

「それは兎も角も御勝手次第」

「アレ後室、左近太郎殿も御同心。扉を開くはそなたの役、早うく」

とありければ、

母は清めの空手水、注連縄解き立ち寄つて、海老錠びんと扉を開き、

「コレ榼、扉は開いた。中の箱はそなたの預り。錠開けて書を取り出だし、御神前にお供へ申しや」

「アイ」

と答へてしとくと、歩むとすれど気は空に、口は経やら祓ひやら、たい一時に一生の年を寄つたる浦島が開けて悔しき箱とも知らず、畏れみ慎み取り出だし二人の中に据え置き、鍵にて開く箱の内、見るより『ハッ』と驚けり。

後室素知らぬ風情にて、

「コレ、何をうちくしてゐやる。御両所のお待ち兼

治部の大輔

後室

榼

乾平馬、恭しく、八くらの机に御鬮を乗せ、両人の中に据え置きて、遙かに退つて畏る。

「これはく照綱殿、御同道と存じたれども老足のはか行かず、却つて御面倒とそろくお先へ参つた。親王の仰せとは申しながら、遠所の所御苦勞千万。これは保憲が後家、御存じの通り拙者が妹。次は榼、お見知りなされて下されう」

「如何様、御母子共に名は承り及んだれども、お目にかゝるは初めて。申さば今日は保憲殿遺跡の定まり。さぞお悦びなされう。イヤナニ治部殿、御鬮の次第を日の内に親王へ申し上ぐるためなれば、お支度よくばいざ御鬮をお取りなされまいか」

「イヤ、まつお待ちなされ。仰せの如く今日は名跡の相続、未来の保憲もさぞ大悦。とてももの事にかの金玉兎集を取り出だし、神前に供へ置き、その前にて

ね、早うこゝへ持つておぢや。アレまだいの、おれにばかり物言はせ、黙つてゐるどころぢやあるまい。合点が行かぬ」  
と立ち寄つて、

「ヤアこりやどうぢや。大切な家の秘書、この内にござらぬ」

と聞いて驚く左近太郎、ほつと溜息吐くばかり。  
治部の大輔声荒らゝげ、

「ヤア後室、ないと言ふてことが済むか。両人は錠預かり、外に知らう者がない。詮議して身の垢脱け、左近もこれにお居やれば、兄弟とて容赦はならぬ。一巻の在り所言はねば骨を拉いで言はず。なんとく」  
と仕組みの詞、

後室

榼が膝引き寄せ、

「コレ、今を聞きやつたか。現在おれが兄弟でも、容赦のならぬお沙汰。そなたとてもその通り、娘の遠慮なりませぬ。サア、誰れに盗んでやりやつたぞ」

「これは母様のお詞とも覚えぬ。わしが盗んで誰れに遣ろ」

「イヤ、遣りたがるその相手も、この母が睨んで置いた。猛々しう言やつても、盗んだは慥か、慥か。嫌とは言はさぬ。肝心締めまりの中の鍵はそなたの役。仮令外におろした錠の合鍵はいつでも什易い。大胆な合鍵してようも目を抜いたな。あり様に言はぬと、骨をばきく折つて言はず。サア吐かせ、出しをれ」と、腕まくりする吃相に、

榊はとかう泣くばかり、差し俯いて答へなし。

「ヤア後室、手緩し手緩し。引括つて鴨居へ吊り上げ、白状さするは治部が得物。そこ退かれよ」

とひしめく所へ、

榊が部屋より平馬が高声

「同類を捕へし」

と、保名が胸ぐら引立つる、

「これは難題狼藉たり。放せ、放せ」

も放さばこそ、烏帽子素袍を引きしやなぐり、座敷へど

うと打ち据ゆれば、

榊は『ハツ』と胸塞がり、

左近太郎も一座の手前、顔色変つて、

「コレ保名、変つた所で対面いたす。今日をいつと心得て、この所へはどうして来た。忝くも桜木の親王、保憲が跡目相続の御差図、芹屋の兵衛、安倍の保名、伽藍籤の鬮に任せ秘書相伝は時の運。弟子と弟子との立ち合ひは、後日の心よからじと御賢慮をめぐらされ、治部殿と某二人が名代。左近太郎が鬮取り気遣ひで和殿は来たか。親王の御下知背くといひ、主人小野の好古卿、顔まで汚す不屈き者。サア言訳せねば左近が立たぬ。性根定めて返答あれ」

と、理の当然に差し付けて、

言訳ならぬ身の誤り、恋に心を苦しめり。

治部の大輔せゝら笑ひ、

「ハ、ハ、ハ、ハ、保名のどろめと道満と同日に言ふも勿体ない。さすが治部が智程あつて、潔白に身を守り、こんな所へ出しやばらねば、盗人と言はるゝ恥もかゝ

ず、自然と極る師匠の跡継ぎ、鬮取りも糸瓜もぬら

ん。ア、コレ後室、誰れに遠慮しておゐやる。どれや

い女郎を詮議して、巻き物を渡されよ」

と、おのが盗み取りながら人を虐げる欲面兄弟、後室保名が襟首掴み引き伏せば、

榊の前

「コレノウ暫し」

と寄る所を

「エ、面倒な邪魔女郎」

と、髻を片手に二人を捻ぢ付け、

「ヤイ恩知らずの罪人めら。師匠といひ親といひ、目を抜いて腐り合ふ罰の報ひは早いもの。エ、おれが産んだらかうはあるまい。元を言へば和泉の国信田の庄司に貰ふた娘。生さぬ中と分け隔て、継子根性親喰らひ。日頃可愛がるこの母をよう皮にしおつたな。

コリヤおのれはまた、過ぎ行かれた師匠の名乗りの一字を貰ひ、オ、結構なお弟子殿、死なれた夫を譏るぢやないが、娘に甘い阿呆故、修羅の種を造らする。

エ、憎い奴ばら腹癒せに」

と、名残り情けもあら拳、目鼻も分かず打ち伏せしは、

地獄の呵責目のあたり、閻魔王に親あらば、お袋なんどと言ひつべし。

榊は涙せきあへず、

「恥づかしきお疑ひ、小さい時よりお世話になり、

真の親より百倍の御恩を仇に思はねど、図らぬ今の

憂き難儀。保名様に科はない。盗まぬ知らぬ言訳に

は、この身一つを兎も角も、お心晴らして給はれ」

と、泣き詫ぶるこそ切なけれ。

「ア、コレお身の言訳には及ばぬ。来たるまじきこの所へ参りたる保名が不運。覚えなき身の打擲も師匠の連合ひ手向かひならず。好古卿の面晴れ、保名が家名は汚るゝとも、五臓六腑は汚れぬ、腸引き出して申し訳、介錯頼む左近殿」

と、差添はずと抜き放す、

その手に縫つて榊の前、刃物もぎ取り

「南無阿弥陀」

と喉にがはと突き立つる

「コハ早まつた生害や」

と、保名が仰天

照綱も、呆れ果てたるばかりなり。

手負ひは苦しき氣を取り直し、

「早まりしとは愚かの仰せ。よしなき恋につながれて、言訳立たぬ御切腹。そもや後れてあられうか。

母様も伯父様も御不肖ながら聞いてたべ。弟子の中

にも保名様、氏といひ、器用といひ、そちと娶合はし

末々はと、宣ひし事もあつた故、父のお詞に甘えて

お二人の目顔盗みし母の罰。玉兔集の行き方も、推量

はしつれども、どうもく言はれぬ相手。清き心は

天道や神仏を証拠にして、死んで行く身が言訳。名

残り惜しの保名様。左近様、頼み上げます」

と、声も涙もせり詰めし、この世の苦患四苦八苦、刃

の氷名残りの霜、消えて果敢なくなりにつけり。

保名は死骸に縫り付き、前後不覚嘆きしが、元来正直突

き詰めたる胸に思ひの氣も散乱、むつくと起きて、

「ホ、、、ハ、、、こりや目出度い、どうも言ハ

ぬ。ハ、、、アハ、アハ、面白い」

と、正氣失ふ高笑ひ。

左近興覚め、

「コレ保名。照綱ぢや、覚えてゐるか、心を定め取り

直せ」

と制すれば

なほきよろしく声、

よしや世の中死んだがましかいの

生きて思ひをコリヤよいく

「ハ、、、アハ、、、」

げらく笑ひに

一座もうろく

治部の大輔底氣味悪く、立つしほなければ仏頂面、

「エ、一人はくたばる、一人は違ふ。氣違ひの守りは

左近太郎、詮議して帰られよ」

と、往くを

引き止め

「ヤアコレ、詮議が残り申した。事相済むまでまづ待たれよ」

「イヤ其元は若役、老人が儀はご容赦。ハレヤレ、今

日はびつくりの仕続け、それ故か腹もがつくり。年寄

りと紙袋は入れにや立てられぬ。内へ往んで入れませ

う」

と、盗み取つたる巻物を腹にかこつけ立ち帰る。

「ハ、ア去ぬるはく。おれも去の。ヤなんぢや、一

人は去なさぬ。なんのいとしいそなたを置いて、一人

は去なぬ。サアおぢや、立たしよ」

と榊が打掛花摺衣、菊のしげ縫ひ乱菊の、乱れ心や乱

れ髪、肩に打ち掛けくるくく、狂ひ出づるを

「コリヤ遣らぬ」

と留むる平馬を踏み飛ばし、絶る後室取つて投げ、撲り

退け打ち退け、

「榊、榊」

と逆上る。

狂人狂へば

不狂人、左近太郎が留むる袖

振り切り振り切り狂ひ行き、恋路に迷ふぞ果敢なけれ。

乾平馬仕済まし顔、

「仏もない堂にござらずと、左近殿もお帰り」

と、言はせも立てず飛び掛かり、素首捕へてもんどり打

たす、

後室猛つて

「コリヤ狼藉、どう仕やる」

「ヤア狼藉とはおのれはら。盗人の化け頭はれた。こ

れを見をれ」

と差し付ける、

「ム、それは榊が預つた箱の鍵」

「ホ、榊が鍵は今一つこゝにある。盗人婆めが立ち

舞ふ内、落としをつたこの合鍵、よう榊を殺したな。

主従共に猿繫ぎ、御所へ引く。腕廻せ」

と、睨め付けられて

二人はわななく、逃げ支度する所へ。

息を切つて与勘平、

「ヤア奴来たか、来たか」

「ネイく、内証台所で女中に聞いた、憎い婆め。

保名様のご名代、きやつは拙者に下はりませ」

「オ、兎も角も」

と抜き放せば

平馬も逃れぬ死に物狂ひ、二打ち三打ち叶はじと、奥を差して逃げて行く。

婆が首筋奴が片手、

「ギヤツと言はずとニヤンと鳴け。猫股婆めが成敗

は、これよくこの注連縄」

開けた扉の上にかたくひつ解き、

首に纏へば跳ね廻る、野良猫古猫するく畏、縄先左の手に絡巻き、ちよいと引けば

七転八倒、

ぐつと引けば

目玉もぐつと、抜いて取つたる一卷の、報ひは目の前藻掻き死に、心地よかりし有様なり。

左近太郎は平馬を追詰め、ちやうど打つたる太刀影に首は飛んで体は乾、猫と並んで死してんげり。

「コリヤく奴、保名に早く追付いて、子細を語らば

正気になるべし。急げ、急げ」

「ネイく」

と、心静かに刀を納め

出で行く武士に仁義あり

奴に過ぎた忠義あり

帰りし伯父に詮議あり

死したる娘に不義あれど、恋には赦し有明の、月の都に照綱が武勇の、誉れぞ世に高き

## 保名物狂の段

千早振袖打掛も、鄙に目馴れぬ取り成りの、葛の葉姫と聞こえしは、信田の庄司が秘蔵の娘、心に深き立願の徒歩路厭はぬ神詣で、鄙には稀な品形、花も色にや恥ぢぬらん。

外珍しい女子共、

「申しく姫君様、今日は俄のお供にて我々までもよい気晴らし。さふして今日の神詣では、なんのおため」

とほのめけば、

「オ、語らねば知らぬは尤も。いつぞやより毎夜血筋に離るゝといふ心掛りな夢見る故、都に在します姉上榊の前様のお身の上に、もし悲しい事もあらうかと、それ故の神参りぢやはいな。皆達も共々に随分と願ふてたも。頼む、頼む」

と同胞を、思ふ心ぞやさしけれ。

「オ、お前様の御姉妹思ひ、神も納受遊ばさいで

は。したが申し姫君様、それはてつきり逆夢でござります。庄司様の甥の殿石川悪右衛門様、お前がお嫌ひなさるゝ程しこり掛かつて女房呼ばり。その悪右衛門様に離るゝといふ夢の告げ。お悦びなされませ」

「オ、ようぞや、祝ひ直してたもつた。あの人に思ひ切らるゝといふはこの上もなき悦び。嬉しいはいのう。ガ、とゝ様もかゝ様も追付けこゝへお出での筈」

「オ、それならば待ち合はせ、御一所にご参詣。この間に散り残りの花を、覧もお慰み」

と、手ん手に敷くや毛氈の、朱は都の唐錦、打ちこんじたる女中の遊び、皆々幕にぞ

恋よ恋、我れ中空になすな恋、うら吹き返す形見の小袖、見るに思ひの増す故にこそ狂はずれ

狂ふは誰そや、我れはそも、安倍の保名が安からぬ、胸に迫りし数々より、いづくを差して和泉路に、寄る辺の水も泡沫の、漂ふ姿乱れ髪。

素袍袴踏みしだき、浮かれ歩くぞたゞならね。

「これく物問はう。もしこの辺りへ十八九の娘の搔取棲で、しやならくへ行かぬか。ヤアく知らん、オ、オその尋ぬる人こそ」

芝蘭芙蓉の花の容顔、姿は物が及びなき。

夜さの泊まりはどこが泊まりぞ

草を敷寝の肘枕、々々、一人明かすぞ悲しけれく

葉越しのく幕の内、昔恋しき面影や移り香や

その面影に露程も

「似た人あらば教えてたべ。遠近人に物問はん、オ、イ、オ、イ」

と、招けば

招く与勘平、心細道分け迷ひ、行けば綱引の声さへも、

梢まばらに末枯れて、影も姿もちらくと、急ぐ心に道

捌も、行く手の森を目当てにて、漸うに辿り着き。

「これはく正体もなき旦那の有様、余所の見る目も恥ぢ給へ。サアお帰りと、諫め賺して

引く手を払ひ、かしこに茂る榊の枝に、形見の小袖打ち掛けて

「アレくく、枝にゆかしき人が見えたり、嬉しや」

とてよち登れば、

榊の枝は身を通し、愛着は身を焦がす。

「こはそもいかに浅ましや」

と、詮方涙に伏し沈む。

「こは情けなき御有様、心なき草木を焦がれ給ふも迷ひの空目」

「ナニ、空目とは事可笑しや。心あればこそ時を違へず。ア、アレくく、オ、ソレくく、ソレそ

ここに」

「どれ、どこに」

真実君に逢いたくば、信田なる社に歩みを運びて七日

なんく七夜さ、籠らば御利生正しくあらたに

恋しき人には逢ひも見せめ

中にとさら榊の枝に、君が小袖を打ち着せて、紛ふ方なき榊の前、非情とは与勘平、

「ナイ、ナイ、ナイ」

「汝こそ草よ木よ」

と、形見の小袖身に添へて、泣いつ笑ひつ様々に、狂ひ乱るゝばかりなり。

始終幕の物見より、覗き見とれて葛の葉は、

「賤しからざる都人、何故かゝる乱心」

と、幕絞らせて立ち出づれば

娘を見るより狂ひ人は

「ノウなつかしの榊の前」

と、抱き付かんと立ち寄るを

付き付きの女、押し隔て、

「コレく粗相せまい。あなたに覚えもない事を、

滅相な気違ひ殿。それ留めさつしやれ、奴殿」

「イヤ留めておりまする、お気遣ひなされますな。

モ語るも主人の恥なれども、一通り聞いて下さりま

せ。エ、手前の旦那が思ひ人に後れ給ひ、それより正

気を取り乱し御覧の如く物狂ひ。その恋人にあなた様が、ヤモそれはとんと生き写し。重々甘えたお願ひなれど、焦がるゝ人に似た姫君、優しきお詞掛け給へ」

と、余儀なく頼めば

葛の葉は、まだうら若き心より、答へなければ、

腰元共、

「申しく、姫君のお詞で、アノ気違ひが治るなら

ば、それはくきつい善根。見れば見る程よい殿御」

恋故と聞きや女子気も、傾き易き楢船の、いなにはあらず葛の葉も、

「それがマアあられもない。どう言ふてよかろうやら」

と恥づかしながら、立ち寄つて、

「恋しと思し召す方がお果てなされて狂気とは、おい

としほや、お笑止や。世にはまた忘れ草もある習

ひ、お心を取り直し、最早お帰り遊ばせ」

と、言へば

保名も心を静め、よくく見れば榊ならず、似たりと思



ふ執着につれて心も正気となり、面目なげに差し俯き、暫し答へもなかりしが。

「ヤイ与勘平、おれは正気になつたるぞ」

「ナニ正気、アノ正気、テサテ嬉しや忝や。これも偏にああなたのお蔭。お礼、お礼」

と主従手を下げ、悦ぶにぞ。

葛の葉姫も面映ゆげに、

「田舎育ちの自らがちよつとお詞掛けたとて、お心の治まるとは、ホ、ホ、ホ、オ、恥づかし」

と顔赤らめ、

「早速ながら、ちとお尋ね申したいはそのお小袖、自らが慥かに覚えのある模様。今また仰る榊とは、もし加茂の保憲様の」

「オ、その娘の榊の前」

「ヤア、そんなら私が姉様」

と聞くに保名も

「聞き及ぶ、信田の御息女葛の葉殿か。これはこれは」

と驚きしが、

「拙者は榊の前と深う契りし安倍の保名」

と聞くにい今さら余所ならぬ、姉の噂に驚かれ、

「この頃悪しき夢の告げ、榊様の身の上がお果てなされし入り訳を聞かせてたべ」

と取り付けば、

「オ、聞きたきは尤もながら、こゝは往還、人目もあり。幸ひの幕の内、委細あれにて話し致さん。この上は妹御を榊と思ひ神かけて」

と目元で知らせば

詞さへ、岩木ならねば葛の葉も、綻び易き幕の蔭、伴ひてこそ入りにける。

貝鐘太鼓乱調に、嵐につれて聞こゆる物音、

『何事やらん』と安倍の保名、

姫諸共に立ち出づれば、

間近き森のこなたより、年経る白狐駆け来たり、葛の葉保名が真ん中へ、四足を潜め屈みある。

「ムウ読めた、今聞こえし貝鐘は狐狩り。飛鳥懐に

入る時は狩人もこれを取らず。ム、助けてやらん」

と言ふ折から、

時に向かふの提伝ひ、真つ黒になつて石川悪右衛門、伴の白狐を見失ひ、きよろしく眼に姫を見付け、

「これは葛の葉姫か、見付けた白狐取り逃がし、縁起悪く思ふたに願ふところの女房狩り。サア葛の葉おぢや」

と立ち掛かるを

「ノウうるさや、赦して」

と逃げ行く姫を

引捕へ、無理に引立て行かんとす、

「これは無体」

と留むる保名、

「エ、邪魔ひろぐな」

と無法の石川、

堪り兼ねて与勘平、悪右衛門を引き退けて、大地へどうど投げ付けば、

「叶はぬ赦せ」

と悪右衛門、後をも見ずして逃げて行く。

「この間に姫を屋敷まで」

「実に尤も」

と与勘平、姫を伴ひ行く後へ

また引返す石川が、大勢引き連れ立ちほだかり、

「最前はよう手酷い目に逢はしたな。おのれ一人を手捕りにせん」

と、群がり掛かるを

事共せず、受けつ流しつ戦ひける。

敵は大勢

こなたは一人、

『無念』と立ち寄る保名をば

突き退け跳ね退け張り飛ばし、いづく共なく立ち帰る。後に保名は齒嚙みをなし、

「チエ、口惜しや残念や。もうこの上は名字の汚れ」

と、既に自害と見えたる所へ、

こなたの方より葛の葉姫、それと見るより走り寄り、

「ノウコレ暫し待つてたべ、早まり給ふな保名殿」

と言ふに

保名も気を取り直し、

「オ、そうぢや、思ひ付いたり。住吉に隣つたる津の  
国阿倍野は我が本国。暫くかしこに引き籠り、時節を  
待たん」

と勇めども、立つ足さへもよろしくくと、  
風に揉まるゝ榊の枝を、杖よ柱と葛の葉が、保名の手を  
引き労りて、阿倍野を差して

### 葛の葉子別れの段

隣柿の木を、十六七かと思ふて覗きやしをらしや、  
色づいた、かけて織る

所も阿倍野の芦垣や、間近き住吉天王寺、靈仏靈社に  
歩みを運び、父は我が子の出世の祈り、母は心を染機の  
辛気辛気を堅横に、梭を投ぐる間の手すさびも、子に世  
話織るとぞ見えにける。

母は機屋を立ち出で、

「コレく坊ち、昨日もと様、『こいつには悪い癖  
がある。たゞ虫けらを殺したがる。今から殺生好ん  
で碌な人にはなるまい。必ず蜻蛉釣るなよ。禰宜や  
蝗を殺すな』と、お叱りなされたを忘れてか。必ず  
必ず庭より外で悪足掻きしたもんなや。サアこゝへ  
おぢや、こゝへおぢや。先から間もある、乳飲ん  
で昼寝しや」

「アイ、そんならかゝさん、晩には松虫塚へ虫をたん

と取りに行くぞや」

「オ、安いこと。それもと様連れてござろう。コ  
レ、小言言はずと」

ねんねこせ、ねんねこせ、ねんねが守りはどこへ往た  
手間隙取らずやくくと、母に添寝の幼子は、いかな  
るよい夢見るやらん。

折柄来かゝる木綿買ひ、門口から声高に、

「おかさん内にか。ホオ添乳なされてぢや。この頃の  
雨続きでめつきりと木綿の値がよいが、織りだめがあ  
らば一疋でも半疋でも、売らしやんせんかい」

「ア、コレ、今子供の寝入口。嵩高に物言ふて下さん  
かな。売る木綿は切れ一尺もござんせぬ。ほんに今日  
程不思議なことはない。ついに見馴れぬ木綿買ひ達  
が、無いと言ふに立ち替はり入れ替はり、こなたで三  
人。そして家の内や人の顔をきよろくと、合点のい  
かぬ木綿買ひ達、無い所に長居せずと、とつと去ん  
で下され」

と、愛想なければ

立ち上り、

「ハテおかさん、そう没義道に言はずとも、仕事は心  
につれるものぢや。氣丈けを長う心の幅広う。詞に艶  
もある様に、その内織つて下さりませ。また御無心に  
参らう」

と、元来し道へ帰りけり。

「ア、よしない事に隙取りしが、嬉しや日脚も八つが  
しら、七つの墨へは届く手の、片付けて儲けせん。ね  
んねこねこ」

とたゞき付け、また機前に差し掛かり。

隣柿の木を、十六七かと思ふて覗きやしをらしや  
卑しうはあらぬ棲外れ、老人夫婦の旅姿、娘めく人介抱  
し、人の教えのそんじよそこと、軒を目当てに尋ね寄  
り。

「ほんにこゝよ」

と父の老人、二人を近付け、

「保名の在り所聞くと等しく、これまで同道はしたれ  
ども、よく思へば別れてより早や六年、長の年月

生死いせきにの問ひ訪れもせず、この方こそ変らねども、保名の心底計り難し。まづ某一人対面し、所存を聞いてその上で、母も娘も呼び出ださん。暫くこゝに影隠せ。いで案内せん、頼みませう、物申さん」

と内に入り、見れども見れども人はなし、  
「さては保名は他出たしゆ召されしか、あの機音はたおとは召使ひか。御免あれ、それへ参る」  
と、窓に立ち寄り顔見合はせ、

『さつても似たり』とびつくりし、興覚め門へ駆け出づれば、

女も窓の戸引立て、織る手拍子の音すめり。

「ヤレくかよ、娘よ、奇妙々々。娘の葛の葉が、あそこに機織つてゐるはい」と、呆れ顔、

「ア、つがもない。これこゝにある葛の葉が、なんのあそこに機織つてゐるものぞ。広い世界に同じ人間。似た人もあらいでは。ア、仰山な」

「イヤノウ、大概物の似たといふは鳥かすと鳥、雪と

引き寄せて、

三人顔を眺め合ひ、溜息

ついたる、折からに。

立ち帰る安倍の保名、それと見るより

「ヤア、庄司殿御夫婦か」

「お身は保名か、ノウ懐かしや懐かしや」

「イヤ、それはこの方も御同然。まづ奥へいざ御案内」

と立つ

袂を控え、

「まづく、急に渡すものあり。コレ、預りの葛の葉連れて参つた。渡し申す、賀殿」  
と、引き合はされて

葛の葉は、さすが二人の親の前、言はで心を知れかしの、顔に会釈ぞこぼれける。

保名、大きに痛み入り、

「これはく、拙者が留守の内、早や葛の葉に御対面

雪。その段ではない。正銘正真の娘の葛の葉よ。疑はしくば、覗いてお見やれ」

「それは興きようがる似た人や。娘もおちや」

と差し足し、忍ぶ間近き窓障子、破れに二人が息を詰め、覗けば見交はす顔ばかりか、

『どなたぢや、誰ぢや』

と言ふ声まで、似はせぬやつぱり本々の、  
葛の葉も肝潰れ、母の手を引き逃げ出づる。

「ノウく親仁殿、物が言はれぬ。あちらが真の葛の葉か、これが本の葛の葉か。親の目にさへ今となり、子にどまかれて気が迷ふ」

と投げ首すれば  
葛の葉も、

「かく様、お道理でござります。わしが心にさへ、おれがあの人か、あの人がおれかと思はれて、俄に胸が遣やる瀬せない。とく様どちらをどうといふ、分別なされて下され」

と、袖に縫ぬれば

なされ衣服を着せ替え、今連れて来た様に見せ、この保名を困らせてお笑ひなされうためか。女房も女房、今初めて来た様に、所体しよたいを作つてなんぢやの。ア

ハ、ハ、ハ。この申し訳こそ段々、御息女葛の葉と夫婦になりこれにあること、先年信田の宮にて悪右衛門狼藉の時、すでに事難儀に及び生害しやうがい仕つかろうと存ずるところへ、早速この人が駆け付け様々の介抱。それより一所に立ち退き所々漂泊し、この所の住居すまひ早や五年。安倍の童子と申す五歳の男子を儲たくわけ、大人しく生おひ立ち申すにつけ、これを力にお詫わび申さば、孫に免じ我が不行ふぎやう跡御免せもあらうか。今日は参らう、明日はお詫わびに参らん、と口では申せども、何か所存に任せず。一日々と相延び、今さらお詫わび申さう詞もない。重々の不調法、孫に免じ御勘忍ごかんにんある様に、母様お取り成しなされ下され」

と、身を投げ伏して詫わびにける。

「イヤサ、言訳どころでない。来て見れば不思議たらだら。まづあの機織はたる人を密ひそかに覗いて見ておちや

れ」

「実にも実にも女房はこゝにゐる、誰が機を織るらん」

とつぶやきながら立ち寄つて、そつと覗いてびつくりし、色を連れ立ち帰り、

「あそこにも葛の葉、こゝにも葛の葉。こりやどうじや、こはくいかに」

と顛倒し、奥を見ては呆れ顔、こなたを見ては興覚め顔、物をも言はず立つ居つ、思ひ掛けなき驚きに、たゞ茫然たるばかりなり。

「オ、当惑の体至極せり。我れも信田にて別れし後、悪右衛門が讒言にて重代の所領没収せられ、吉見の山の片里に世を忍び住むその内に、貴殿のことを恋ひ慕ひ焦がれ煩らうこの娘、五年の年月色々看病肝を焦がすところ、不慮にこの頃貴殿の在り処、聞くと等しく、忽ち病氣平癒し、夫婦が召し連れ来て見れば、思ひも寄らぬ二人の葛の葉、今日も明日も覚め果てしが、退いて分別するに離魂病といふ病あり。俗に

寝た姿はいの。童子が母は在せぬか、今帰りし」

と呼ばれば、

前垂襷取り敢へず、

「いつより今日のお帰りは遅かりし。お肌寒にはなかりしか」

「イヤく、空も暖かに住吉へ参詣し、帰りは例の天王寺。ノウ思ひも寄らず六時堂の前、お身の父庄司殿御夫婦にはたと行き逢ひ、日頃の不屈き胸に詰まつて挨拶をし兼ねたれば、あちには一向恨みの気もなく、在り処を聞いた故、娘に逢はうため尋ね来たれども、見る通り連れ衆もあり。この衆を片付け日暮にはこれへ参らう。食べ物の用意は無用、洗足の湯を頼むとモなかく、心解けたる挨拶。一つ二つ物言ふと思ひしが、掻き摘まんでも五年の話、思はず時を移いた。お身も久々の対面さぞ悦び。身も大慶」

と物語れば、

「それは何よりお嬉しや。日暮とて間もなし。用意無用と宣ふとも、なんぞせすばなるまいか」

は影の煩ひといひ、形を二つに分けるといへども、それも一つ軒をば離れず、時々形を合はすといへばそれでもなし。正しくこれは変化の所為か、または天狗の業なるべし。我が娘に引き合はせ真を以て理を押し、忽ち姿を顕はすべし、性根を忘ずるところでなし。保名、心を付けられよ」

「氣を付け給へ賀殿」

と、夫婦力を付け給へば

「仰せまでも候はず。我れも加茂の保憲に従ひこれしきの邪正を糺すこと、一句一指の手段にあり。きつと証を見せ申さん。各々は暫しの内、見苦しくもこの物置に密かにお忍び下さるべし」

と、余儀なき詞に

人々も

「構へて仕損じ給ふな」

と、危ぶ心の物置の簾を上げて忍ばるゝ。

保名事なき風情にて内に入り、

「これはく、坊主めが足掻き章臥れ、この踏反つて

「イヤく、孫を突き出しお目に掛けるが馳走の一番。お身も髪に櫛でも入れ衣服も着替え、しをたらとした体を見せませぬ、それが馳走の第二番。サ早う早

う、身は夜と共の物語。この草臥れでは続くまい、日暮まで一睡せん」

と言ひつゝ女房の形風情、見れども

驚く体もなく、髪取り上ぐるその姿

『どつこに一つの言ひ分なし。たゞしは娘を連れて来た庄司夫婦が、なんぞではあるまいか』

と、迷ふ心の奥の間に、忍びて事を窺ひける。

妻は衣服を改めて、しをくくと奥より出で、臥したる童子を抱き上げ、乳房を含め抱き締めて、言はんとすれどせぐり来る、涙は声に先立ちて、暫く嘔み入りけるが。

「恥づかしや浅ましや、年月包みし甲斐もなく、おのれと本性頭はして妻子の縁をこれ切りに、別れねばならぬ品になる。父御にかくと言ひたいが、互ひに顔を合はせては、身の上語るも面伏せ。御身寝耳によく覚え、てゝ御にかくと伝へたべ。我れは真は人

間ならず。六年以前信田にて悪右衛門に狩り出され、死ぬる命を保名殿に助けられ、再び花咲く蘭菊の、千年近き狐ぞや。剩え我れ故に数ヶ所の疵を受け給ひ、生害せんとし給ひし命の恩を報ぜんと、葛の葉姫の姿と変じ、疵を介抱自害を、留め勞り付き添ふその内に、結ぶ妹背の愛着心、夫婦の語らひ為せしより、夫の大事さ大切さ、愚痴なる畜生三界は、人間よりは百倍ぞや。ことにおこことを儲けしより、右と左に夫と子と抱いて寝る夜の睦言も、夕べの床を限りぞと、知らず野干の通力もいとし可愛ひに失せけるか。今別るゝとて父御前の業でもなく、元より名を借り姿を借りし葛の葉殿、恩はあれども怨みはなし。庄司殿御夫婦を真の祖父様祖母様、葛の葉殿を真妻の母と思ふて親しまば、さのみ憎うも思すまじ。悪足掻きをふつゝと止め、手習ひ学問精出して、さすがは父の子程あり、器用者と誉められよ。何をさせても埒明かぬ、道理よ狐の子ぢやものと、人に笑はれ誹られて、母が名までも呼び出すな。常々てゝ御前の虫けらの命

来ずとも仕様模様もあるべきに、無惨の次第を見ることや」

と、夫婦が悔めば  
葛の葉も、手持ち無沙汰に見えけるが。

「ア、そうぢや、何はともあれ斯くもあれ、自らが姿となり自らが名を名乗り、産んで貰ひしこの坊は取りも直さぬ我が子なり。とゝ様かゝ様お前方のためにも、真実の孫ぢやと思ふて下さんせ。コレ坊ち、今からこの母が身に代へて愛しがる。今までのかゝ様の様に、かゝ様かゝ様としなつこしう頼むぞや。オ、よい子や」

と抱き給へば  
乳を探して

「イヤ、このかゝ様はそでない」  
と、膝を這ひ降り見廻して

「かゝ様、かゝ様」  
と呼び叫べば、  
保名堪へ兼ね大声上げ、

を取る、碌な者にはなるまいと、たゞ仮初のお叱りも、母が狐の本性を受け継いだるか浅ましやと、胸に釘刺す如く、なんぼう悲しかりつるに、成人の後までも小鳥一つ虫一つ、無益の殺生ばしすなえ。必ず必ず別るゝとも、母はそなたの影身に添ひ、行末長く守るべし。とは言ふものゝ振り捨てゝ、これがなんと帰られう。名残りをしや、愛ほしや、離れ難なや、こちら  
寄れ」

と、抱き上げ抱き付き抱き締めて、思はず『ワツ』と泣く声に、  
保名一間を走り出で、

「子細は聞いたり何故に、童子を捨てゝ遣るべき」  
と呼ばゝる声に

庄司夫婦、

葛の葉も転び出で、『放ちは遣らじ』と取り付けば、抱きし童子をはたと捨て、形は消えて失せにける。  
庄司目をしばたゝき、

「エ、さて夢ばかりかくと知つたらば、ふかく尋ね

「たとへ野干の身なりとも、物の哀れを知ればこそ、五年六年付き纏ひ命の恩を報ぜずや。況んや子まで儲し中、狐を妻に持ったりと笑ふ人は笑ひもせよ、我れはちつとも恥づかしからず。別るゝと相對にて互

ひに合点の上は、失せもせよ消えもせよ、この儘にてはいつまでも放ちはやらじ、ヤア葛の葉、童子が母よ、女房よ」

と、間の襖を引き開ければ、

向かふの障子に一首の歌、

恋しくば、尋ね来てみよ和泉なる、信田の森のうらみ

葛の葉

「ハア、さては一首の形見を残し、つれなうも帰りしな。我れに名残りは残らずとも、童子は不憫に思はずか」

と、奥に駆け入り表に出で、狂気の如く駆け巡れば、

童子も父の後に付き、

「かゝ様どこへ行かしやつた。かゝ様ノウ」

とかつぽと伏し、声をはかりに足摺りし、身を悶え嘆く

にぞ、

庄司夫婦、

葛の葉も、共に哀れに取り乱し、前後不覚に嘆かるゝ。

庄司嘆きを留めんと思ひ、

「ヤア保名、不覚なり。狐ばかりが葛の葉で、我が娘は葛の葉ならずや。ことに残せし一首の歌、『恋しくば尋ね来て見よ』と詠んだれば、いつでも信田へ行けば出で逢ふに疑ひなし。エ、未練散々、卑怯、至極」と諷むるところへ。

今朝より立ち舞ふ木綿買ひ、一つになつてつゝと入り、

「ヤア、安倍の保名、葛の葉、信田の庄司、見付けた見付けた。かく言ふは石川悪右衛門殿家来、荏柄の段八」

「信楽雲蔵」

「落合藤治」

「主人のお心を掛けらるゝ葛の葉を隠し置く保名は密夫同然。打ち殺して姫を連れ来たれと、この頃こゝに徘徊し、今日出喰はせたは百年目」

と振り廻し、日頃には似ぬ強勢も、狐や力添へぬらん、激しかりける働きなり。

落合は逃げ仕度、

段八、

雲蔵、生兵法、

肋と眉間に大疵受け、のたり廻つて死してげり。

人々駆け出で、

「手柄、手柄」

と勇めども、

葛の葉は勇みなく、

「何を言ふても私に、乳がなうてはいつまでもこの子が馴染まう様がない。あつちにあつてもいらぬ乳、貰ふて欲しい」

と泣きければ、

「才、道理々々、それまでもなく一度は、尋ね逢はばは叶はぬ義理。夜道を行くもたどくし、明けなば夫婦童子を連れ」

尋ねて来ませ和泉なる、信田の森へと

「女房があつても首がなうては済むまい。畏つたと葛の葉を渡せ渡せ」

「渡せ渡せ」

と呼ばゝつたり。

老人夫婦足弱の、ことに嘆きに気も後れ、途方に暮れて立ち騒ぐ、

保名、『ハツ』と心付き、

「申し申し騒ぐまい。葛の葉は童子を抱き御夫婦を介抱し、裏口を出て影隠した。遠いへ逃ぐるに及ばず」と、裾ひんからげ突立ち上り、

「ヤア愚者に向かつて返答なし。葛の葉が欲しくばこの保名を首にして連れて行け。サア来い」

と、形見こそ今は仇なれ幸ひと、織り掛けし下機の招木、掛板、巻竹よ、藤、杼成よ簀なんど、はづみを打つて投げ掛け投げ掛け、躊躇ふところを

「まつかせ」

と、親機『エイ』と打ち放し、

「科ある者を成敗の磔といふ機物の塩梅見よ」

蘭菊の乱れ

こゝに哀れを留めしは、安倍の童子が母上なり

元よりその身は畜生の、苦しみ深き身の上を、

語り明して夫にさへ、

添ふに添はれず住み馴れし、我が古里へ帰ろやれ

我が住み捨てし一叢の、仮の宿りは秋霧に、立ち紛れたる色々菊も、

この身知るかと恥づかしく、足襪立てゝ、

ちよこくくく、ちよこくくくと襪立てゝ、

所体乱るゝ萩薄、

『ハツ』と思ひて取り成りを、作り繕う笠の内。

傾く日影目映ゆくて、

忍ぶ身の障りはこゝの人里、かしこの往来、それに嫌なは犬の声、ぞつとした、ぞつと殺げ立つ露時雨、

降りみ降らずみ照り降りに、

我れは古巢へ帰る身を、

嫁入々々と里の子の、あの幼氣を見るに付け、後に在します父母に、預け置いたる幼子の、乳房尋ねてさこそ嘆かん不憫やと、涙に道も見え分かず。

こゝはいづくとしら露も、千草にすだく虫の声、なほ悲しさの増鏡、水に映して我が姿、  
かいしよありげに行く野路を、そよくそよく野分につれて、あはや奥手からくからり、  
引かぬ鳴子の音すれば、もし狩人のあるやらんと、慌て驚き振り返る、小鳥追ふ家は戸鎖して、それと咎むる人だにも、泣いて身をもや悔やむらん。

今は悔やまじ嘆かじと、言へど乱るゝ蘭菊を、分けつゝ行けば  
程もなく。

我が住む森の下影に、立ち休らうと見えけるが、草隠れして

向かふより

「コリヤ待て、待て待て、遣らぬ遣らぬ、奴が遣らない。コリヤく、よいくく所へ丁度参つて与勘平、髭が手並みを忘れたか。性懲りもなき悪右衛門。乗物置いて突走れ。命助けてこますが、そつちのためにも与勘平。たゞし首に代へる氣でこはりますか」と睨め付ける、

「ヤア推参なる唐辛子め。うぬが命は天井守り、豆腐に切り碎け」

と、主従抜き連れ打つて掛かるを

かひくゞり、取つては投げ取つては投げ

「さつても塩梅与勘平」

逃ぐるを『遣らじ』と追て行く。

道引違えまたこゝに、京より帰る和勘平、刀の鞘に状箱結び付け、ひよかくゝ来たたるを

葛の葉悦び、

「オ、手柄仕やつた、でかしやつた。悪右衛門は逃げをつたか。大勢とたゞ一人、そなたに怪我はなかつた

## 信田森二人奴の段

失せにけり。

時もこそあれ悪右衛門、葛の葉を奪ひ取らんと、手の者引き具し追駆け来たり、

「コリヤく藤治、足弱を同道すれば遠くは行かじと思ひの外、保名めは逃ぐるとも鼻がお敵を手に入れ

よ」

と、きよろつく眼に乗物見付け、

「ヤア物臭し」

と立ち掛かり、戸を押し開ければ

葛の葉親子、『ハッ』と驚き逃げ出づる

「どつこい遣らぬ」

と捻ぢ込み押し入れ

「おかゝ様に子添へまで、保名めを生け捕るよき人質、急げ急げ」

と乗物昇かせ、引返す

かや」

「ヤア、これは何仰る。奴めは旦那の御用、一昨日の朝京へ上り、左近太郎様に御目に掛かり、お返事はこの状箱。安倍野まで戻つて見れば、思ひがけねえ庄司様御夫婦、お前のお噂かのゝ様子、びつくり直ぐ様参つたはたつた今、手柄の手の字白癩覺えこはりませぬ」

「またあの人の卑下を言やる。悪右衛門が大勢追ひ払やつた氣味のよき。この葛の葉がよう見てゐる」

「ア、イヤく、なんぼ見てござらうが、覚えねえ与勘平。実にも晴れにも髭一人。葛の葉様なら二人もある筈。たゞしはお前がかなではないか。滅多に側へ寄らしやますな」

と睨濡らせば

「エ、何言やる、そなたこそどきくと、紛らはしい

与勘平」

「ア、イヤお前が」

「イヤ我が身が」

と争ふ後ろへ

むらくくと取つて返す悪右衛門、

「アレ逃がすな」

と下知をなす。

「ヤアようこそく石川殿。手柄の覚えなかつたにさしに來た心中者め。とてもさして下んすなら前髪がよかるもの。剃りこくつた生男首。えいは、儘よ、高野六十那智八十、取つてくれん」

と抜き放し、切つて掛かれば

さしもの大勢、立つ足もなく逃げて行く。

葛の葉は童子を抱き、

「コレく危い、長追ひ無用。戻りやく」

と身を焦る

弓手の畦より落合藤治、

「サアしてやつた」

とひん抱かへ、宙に引提げ駆けり行く。

尾花萱原蘭菊の、茂みにありくくと勘平、

「コリヤさせぬは」

と投げ退くれば

ひるまず抜いて打ち掛かるを

「任せておけろ」

が早速の早業、切り立て切り立て追ひまくる。

親子は前後敵の中、逃れん方なく乗物の、戸を引き立てゝ入るところへ

二人の奴は敵を払ひ、東西より立ち帰り

「こゝは危し危し」

と、乗物片手に差し上げしは、肩も揃ひの六尺豊か、手柄も対の大肌脱ぎ、一息つきしは阿吽の仁王、元服したる如くなり。

童子は物見に顔差し出し、

「かゝ様あれを見さつしやれ。おれが平が二人になつた。奴が分じて与勘平」

と手を打ち叩けば。

「実に実にそうだく。和子の詞で奴の詮議。コリヤそやつ、ソレ乗物下ろしてそこへ出おろさ」

「何さ何さ、詮議とは与勘平。うぬが五体もサア持ち出せろ」

「オ、サ出るはくくくく、サア出たは」

「おらも出るはくくく、ソリヤ出たは」

と奴と奴が顔見合はせ、

「おらが我れか」

「我れがおらか」

「鼻の穴の不掃除まで、微塵も変らぬ奴服大紋」

「でつかり据えた三里の灸、擦り剥けたまで、コレ」

「コレ」

「コレくく違はぬく。つくね奴の同作ぢや」

と、互ひに呆れしばかりなり。

葛の葉立ち出で、

「この詮議は仕様がある。コレこちらの奴。そなたの名はなんといふ。それ聞かう」

「これは改つたお尋ね。下郎め元は勘平なれど、旦那に付いて御用先、茶を持って来い、よ勘平。料紙取れ、

「任せておけろ」

が早速の早業、切り立て切り立て追ひまくる。

親子は前後敵の中、逃れん方なく乗物の、戸を引き立てゝ入るところへ

二人の奴は敵を払ひ、東西より立ち帰り

「こゝは危し危し」

と、乗物片手に差し上げしは、肩も揃ひの六尺豊か、手柄も対の大肌脱ぎ、一息つきしは阿吽の仁王、元服したる如くなり。

童子は物見に顔差し出し、

「かゝ様あれを見さつしやれ。おれが平が二人になつた。奴が分じて与勘平」

と手を打ち叩けば。

「実に実にそうだく。和子の詞で奴の詮議。コリヤそやつ、ソレ乗物下ろしてそこへ出おろさ」

よ勘平。煙草盆ぢや、よ勘平。よ勘平、よ勘平、といつとはなしに、コレと勘平」

「ム、シテいづくの生まれぢや」

「これはまた様々のお尋ね。エ、この髭めが生国は丹波の生れ。爺打栗が折檻強く、十一でお家へ参り、足手かいさまに精出しても、高が下郎の精一杯。二合半の物相頭、擦りこぼつたは十四の春。一両二歩の切米に、違ひぬい、お前様もお聞きなされてごはりませう」

「ム、なるほどく、主の話に違ひはない」

「サアくこの奴が身分は済んだ。そやつはまたどつから出た」

「どつから出たとは天から降らず、地からも湧かず、木の股からはなほ出られず、お定まりの穴から出た」

「なんぢや穴から、穴、穴、ハレよう出たなハ、ハ、ハ、ハ。シテ名はなんと」

「ハテ、野干平だ」

「なんだ野干平だ。シテ切米はなんぼ取りや」



「オ、サ、身が切米は十二文。ひん捻ぢ紙の灯明代、本社拝殿玄関前、賽銭箱の皮覆ひ。金紋大総、隠れあらぬ、受領神にぶつ仕へる。鳥居の馬場先踵しつかと踏んづけた。二合半の小豆飯、色こそ変はれ、品こそ変はれ、そのお子産んだ白狐女郎は、おらが仲間の寄親殿だ。頼むに引かれず、ぬつと出た」  
「ハレよく出たな」

「奴が生穴かしこ、人に語るな、女郎花桔梗吾亦紅。身は蘭菊に遊べども、話の尾花はいつかな出さない。悪右衛門主従はこの野干平に打ち任せ、親子の衆のお供して連れて退いたが与勘平。心得たるか」と言ひければ、

「さつてもさつぱり申したり。仲間内の尻持つとは、頼もしい野干平。差込に任せお供せう。悪右衛門の若鼠、あなづゝて罫に掛かるな。余所ながら一曲見物」と、童子を背に生い茂る、葛の葉隠れ草隠れ

こゝに泉州信田の森、葛の葉稲荷と今の世に、伝へまします御威徳と、敬ひ祀るぞありがたき